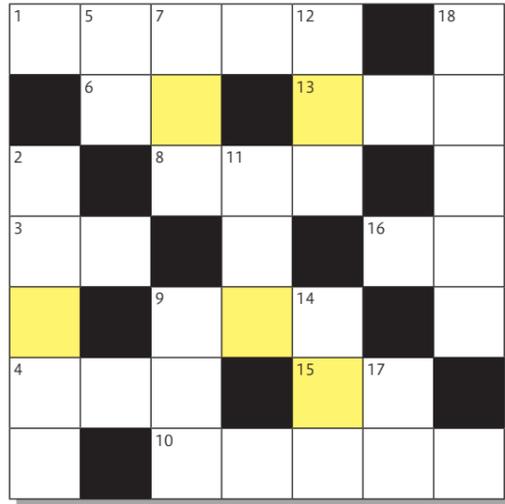


こえ 声 こえ

「ふれあい」第87号をお読みになった読者の方より、多数のおたよりが寄せられました。ありがとうございます。紙面の都合上、その中のいくつかを紹介いたします。これからもみなさんの「声」をお届けいただくと幸いです。

- ◆ドラマをずっと見ていたので、吉田さんの講座に参加してみたかったです。ドラマの内容にも沿っていたようで、そのような話から入ってみると人権の話もより深く理解できるような気がしました。(M.Nさん)
- ◆町民人権講座は、毎回楽しみに参加させてもらっています。会報「ふれあい」も、いつもすみずみまで目を通させてもらっています。人権協の活動に参加されているメンバーの方や事務局の方、本当に大変だと思いますが、みなさまの一人一人の力添えがあるからこそ、今の美浜町があるのだと思います。(K.Mさん)
- ◆人権コラム「あいさつから感じる幸せ」同感ですね。歩いていて、お子さんから元気に「おはようございます」「こんにちは」と声掛けされる時がありますが、とてもすがすがしく思います。私も声掛けは明るく大きな声で心がけるようにしています。(T.Yさん)
- ◆「自分の人生は自分で決める」強い信念が必要なのかなと思いました。自分がされてうれしいことを他人にもする。相手の気持ちを読み取って、思いやりのある行動ができるようになりたい。全てを否定せず、認めて受け入れることが大切なんだと感じました。(U.Kさん)



■ 応募方法 ■ (郵送、FAX、E-mailいずれかでお願いします)

● 答え・住所・氏名を巻末の用紙に書いて下記までお送り下さい。
〒919-1141 美浜町郷市29-3 人権協事務局 (生涯学習センターなびあす内)
※ FAX(0770-32-1222)
E-mail(jinkenkyo@town.fukui-mihama.lg.jp)



感想やご意見もお願いします。

- 〆切は、令和8年4月30日(木)です。(当日消印有効)
- 正解者の中から抽選で、図書カードをお送りします。
- 前号の人権クロスワードの正解は「あなたらしく」でした。たくさんのご応募、ありがとうございました。正解者は21名でした。今回の当選者は **西尾 里子さん 藤田 典子さん 森井 菜々美さん 幸丈 冴香さん 松下 喜美代さん** 以上の皆さんです。おめでとうございます！

人権クロスワードパズル

黄色のわくの中の文字を使ってできる言葉が答えです。



ヨコのカギ

1. 節分の日に、その年の演技の良い方角を向いて食べる太巻き寿司。
3. 鋸〇〇、入母屋〇〇、切妻〇〇などの種類がある、建物の最上部にある覆いのこと。
4. 物と物が擦れ合うこと。〇〇〇係数、乾布〇〇〇など。
6. 物の中心にあるもの。
8. 中世ラテン語の"gunna"に由来する、丈の長いゆったりとした上着のこと。
9. 相撲を行う人のこと。おすもうさん。
10. 中華料理の点心の一つ。グリーンピースが乗ったりエビが乗ったりすること。「焼売」と書く。
13. 原料や素材に手を加えて新しい物を作ること。〇〇〇貿易、〇〇〇食品など…。
15. ほしいと思う気持ちのこと。意〇〇、食〇〇、〇〇望など。
16. 今年は午。

タテのカギ

2. 1月1日から4月1日の間に生まれた人のこと。
5. 勝つと白いものが、負けると黒いものが付きます。
7. 船舶の移動などのために人工的に造られた水路のこと。スエズ〇〇〇やパナマ〇〇〇が有名。
9. 漢詩で八句からなるものこと。
11. ウナギのかば焼きを入れた卵焼きのこと。
12. 物事の中心となるもの。
14. 割り算の答えのこと。
17. 2025年の「今年の漢字」は？
18. 中心部からの光で、内側の影絵が回転しながら写るように細工された灯笼のこと。過去の記憶が、映像のように次々とよみがえる様子を指すことも。

編集後記

広報誌「ふれあい」第88号をお読みいただき、ありがとうございます。今年度の最終号を迎えました。◆何かを始めようとするとき、私たちはまず「知ること」から一歩を踏み出します。インターネットで手軽に調べられる現代、最近ではAIが対話形式で懇切丁寧に答えてくれるようにもなりました。しかし、そこで大切なのは、情報を鵜呑みにせず「何が正しいか」を自ら見極める目を持つことではないでしょうか。◆人権の問題も、まずは「知ること」から始まります。人権尊重啓発協議会の各分会では、皆さんに「知って、感じて、考え、対話して、発信し、そして行動してほしい」という願いを込めて活動を続けています。◆私たち広報部会も常に「何を、どうすれば伝えられるか」を模索してきました。この広報誌が、ご家庭や

地域で「これ、どう思う？」と会話が生まれる一粒の「種」になれば、編集部としてこれ以上の喜びはありません。◆最後に、前号でふれたやなせさんの言葉の続きをご紹介します。やなせさんは「逆転しない正義はない」ともおっしゃっていました。自分の正義が、時に誰かを傷つける武器になってはいないか。人権が守られる社会で大切なのは、正しさを論破することではなく、互いの弱さを認め合える「寛容さ」だと感じています。◆誰もが安心して自分らしくいられる社会を、ここ美浜から。「あした天気になあれ」と願いを込めて、今年度を締めくくりたいと思います。次年度も、一人でも多くの方にこの誌面が届きますように。【広報部会員一同】

美浜町人権尊重啓発協議会会報
第88号
発行：令和8年2月20日 (年3回発行)
編集：人権協広報部会
連絡先：美浜町生涯学習推進課
TEL 32-1212
FAX 32-1222
人権協HPができました!
https://mihama-jinkenkyo.jp/

人権のつどい2025

ATARU NAKAMURA

中村 中 Talk&Live



12月7日に、人権週間に合わせて「人権のつどい2025」が開催されました。

今回のつどいでは、トランスジェンダーであることを公表し、歌手・作詞作曲家・役者として活躍されている中村中(なかむら あたる)さんをお招きし、トーク&ライブが行われました。

中村さんは、2006年に、自ら作曲した曲でメジャーデビューされ、同年9月にリリースした「友達の詩」がブレイク、第58回NHK紅白歌合戦にも出場されています。また、最近ではNHK連続テレビ小説「虎に翼」にも出演する等、幅広く活躍されています。

トークでは、「寂しい思いをしないために人に差をつけない」をテーマに、LGBTQ等に対して今よりも抵抗が強かった学生時代に、人と違うことを理由に、からかわれたり、いじめを受けていたこと等の体験談を話されました。家族にも本当のことが言えず、生きていることさえ辛い時期があり、苦しみを吐き出すために自分に何ができるかを考え、幼少期から好きだった「歌」にしよ



うと決めたことが、作詞家、そして歌手として活動するきっかけとなり、歌を通じて平等な世界になればと活動を続けられています。

トークの合間には「リンゴ売り」や「同級生」等、中村さんの体験をもとに作詞作曲された曲を披露。中村さんの思いが込められた歌詞と綺麗な歌声に会場からは魅了されていました。トーク&ライブの最後に中村さんは、「人権について考える機会が増えると思うが、私みたいな人が生きづらくならない将来が見られるように、活動を続けていきたい」と思いを語られました。

今ではトランスジェンダーという言葉は聞きなれていますが、公表された時は勇気がいったと思います。細い体から迫力のある歌声でとても良かったです。最後の歌、♪死ぬなよ、友よ♪良かったです。

体験を通した曲が多く、トークしながらのライブで曲の内容がよく理解できました。透きとおる歌で心が洗われました。中村さんがいわれるように人権のつどいがなくなる日があるといいなと思いました。

中村さんの魂のこもった力強い歌声に圧倒されました。幼少期から今までのすべてが中村中、その人を造っているんだと思いました。

すごく感動しました。心の叫びのような歌や優しい気持ちになる歌。正直なお話もよかったです。

自然体で正直で、切っ先するどいトーク楽しめました。唄はどれも絶唱です。アカペラの「友達の詩」素晴らしかったです。



第5回町民人権講座

副島淳講演会 「ちがいを楽しむ」

10月23日(木)、俳優・タレントの副島淳さんが、見た目の違い(肌の色や髪質など)を持って生まれた自身の経験をもとに、講演をされました。

副島さんは、違いに対する現在の日本国内の現状について、正直「心が痛むニュース、報道を目にする」ことが多いと語り、自身もSNS上で「お前は左なんだろう」といった「すごく尖った言葉」や「汚い言葉、暴力的な言葉」で意見をいただくことがあると明かしています。これは、社会における違いへの不寛容さが、見えない形で個人を攻撃し続けている現状を示唆しており、心を痛めます。

特に、幼少期に経験した差別的ないじめ、そして転校先で受けた「完全なる無視」の経験は、人権侵害がいかに子どもの心を深く傷つけるかを教えてください。クラスメイトが「汚物を見るような目」で自分を見ていたり、好意的ではない「ひそひそ話」をしていたと感じており、この初期の孤立が、自身の心身を「疲弊」させ、「擦り減って」いく原因となったと述べておられました。

副島さんが講演のテーマとしている「ちがいを楽しむ」ということは、人間関係において非常に重要であると強調しています。「相手との違いを共有して楽しめれば、ものすごく人間関係というのは潤んで豊かになれる」と考えていましたが、その試みが同級生たちの強固な拒絶によって跳ね返されてしまったという事実は、いかに差別が対話の機会を奪い去るかを象徴していると思います。

しかし、副島さんは希望を捨てていません。このテーマで講演活動を続けていること、そして平日の夜にこれだけ多くの方が足を運んでくれたこと自体が、「人権だったり、人種差別をなくす、ゆっくりですけど大きな一歩」だと捉えています。自分の話の受け取り方は自由であり、強制はしないとおっしゃりながらも、まず違いを認識し、その話を聞くという行為そのものが、差別解消に向けた社会的な前進であるということをおっしゃっていました。

副島さんのお話からは、私たち一人ひとりが「ちがいを」を恐れず、対話を通じて受け入れることが、真に人権が守られる社会を築くための土台であることを感じさせられました。これは、まるで、固く閉ざされた門を少しずつこじ開け、光が差し込んでくるような、地道でしかし確実なことであると思います。



10/23 thu

ちがいを楽しむ...深いことです。生きていくと日々ちがうことばかりなのに、ちがいを許せない人の多いことにびっくりです。傷つきたくなくて自分で目を背けている私ですが、お話を聞き力が湧いてきました。

直前に図書館で彼の本を見つけ読ませていただき、色々な経験をプラスに生かし、ポジティブな生き方にとっても好感を持ちました。多文化共生といわれる世の中ですが、最近それを否定するような現象が多く感じられる社会になってきているのが残念です。

「死ぬのはもったいない」という言葉はとも響きました。私は今、それを子どもたちに伝え、そういった子どもたちにも手を差し伸べることができる「先生」という立場にいます。副島さんの話に全く出てこなかった小学校の先生として、今日聞いた言葉、出会いを伝えていきたいと思っています。

中学校での講演会

いま君のいる場所だけが、世界のすべてじゃない

10月23日(木)の夜に、副島淳さんの講演会(第5回町民人権講座)が開催されましたが、昼間に美浜中学校でも中学生向けに人権教育講演会を開催いただきました。

かつてご自身がいじめを経験したことや、それを持ち前の明るさでポジティブに乗り越えてきたことなど、中学生にわかりやすく話していただきました。



～生徒のみさんの感想より(抜粋)～

- お話を聞いて、いじめは怖いなど改めて感じだし、立ち直るときにはまわりの協力が大切なんだと知ることができました。
- 自分の世界は「学校」だけではなくて、もっとたくさん広がっていることを意識して生活していきたいと思えるようになりました。
- 副島さんは、東京の小学校の環境を「たまたま」とおっしゃっていましたが、差別のない環境が当たり前になってほしいと思いました。

- 今の自分を嫌いにならず、自分を認めて自分を信じるのが大事なんだと思いました。今回の話を聞いて自分が今悩んでいることや不安なことは、世界で見たらちっぽけだと思いました。人生何がわからないけれど自信を持って生きていけるようにしたいです。
- 自分の友達を今よりも大切にしたいと思ったり、これから出会うどんな人とも、差別せずに仲よくしたいと思いました。その人にしかないその人だけの良さを見つけられる人になりたいです。
- 私は今年受験生で、嫌だなと思うことが多々あるけど、報われる日は必ず来ると信じて頑張ります。

第6回町民人権講座 “部落ってナニ?”で伝えなかったこと



11/18 tue

11月18日に行われた第6回町民人権講座では、映像プロデューサーの鎮目博道さんにご登壇いただきました。

鎮目さんは、若者のテレビ離れ、特にニュースへの関心の低下という現状を踏まえ、インターネット配信サービスの立ち上げに参画しました。その後、若者に向けたニュース発信を目指し、女性の生き方の多様性をテーマとした番組「Wの悲喜劇」をプロデュースしました。この番組のコンセプトは、「多様性を尊重し、違いを受け入れて認めよう」というものです。

「Wの悲喜劇」が部落問題を取り上げたきっかけは、在日コリアン問題の放送後、構成作家からの「テレビでなかなかやらない部落問題をうちの番組でやるべきだ」との提案でした。鎮目さん自身、長年ニュースに携わりながら、この問題の取材や放送を避けてきたことを反省し、当事者の話を聞いた上で制作を決意しました。

番組制作にあたっては、部落問題の複雑な歴史的経緯の説明を最小限に留めるという方針が取られました。これは、限られた放送時間内で歴史的背景を深く掘り下げると、当事者である若い女性たちの「生の声」を伝える時間が失われてしまう、という判断があったためです。

講演の途中、実際に放送された番組の一部を視聴する時間がありました。番組では、被差別部落にルーツを持つ若い女性出演者たちの、ありのままの体験に焦点が当てられました。結婚の際に親族から縁を切るよう言われたといった結婚差別の事例や、ネット上で個人情報やデマが拡散されるといった悪質な誹謗中傷の現状、それによって当事者が直面している苦悩が、番組の中で詳しく語られました。

視聴者がこのテーマにとっつきやすいよう、番組構成にも工夫が凝らされました。番組の司会進行を務めたタレントのSHELLYさんには、あえてテーマに関する事前知識を持たせないようにし、「部落問題について詳しく知らない人の代表」として、出演者たちに素直な質問をしてもらう構成が採用されました。また、「Wの悲喜劇」は女性だけのトーク番組であるという特徴を活かし、その明るい雰囲気効果的に活用しました。これにより、通常は重く捉えられがちな差別問題であっても、「楽しい女子会」のような雰囲気の中で番組が展開され、視聴者は構えることなく差別の実態を知ることができました。

この番組の放送は、ネット上で特に若い世代から非常に大きな反響を呼びました。Yahoo!ニュースなどの記事にも取り上げられ、非常に多くの再生数や閲覧数を記録しました。鎮目さんは、この放送の意義について、特に若年層に対し「こういう差別があるんだ」という事実を認識してもらうための「入り口」や「きっかけ」となったという点で、一定の成果があったと評価しています。

講演の中で鎮目さんは、「(部落問題について)知らない方がいい」という態度は、悪意のある情報に騙される危険性を生み、差別を助長しかねないと警鐘を鳴らしました。特にネット情報が氾濫する現代社会においては、「正しい情報を知る」ことが差別解消の鍵である、と強調されました。

講演の最後には、鎮目さんが日頃から心がけている以下の3つのことを紹介され、講演を締めくくられました。

1. 今、自分は差別をしていないか。
2. その情報は本当に正しいのか。
3. 相手を認め、正しくコミュニケーションをしているか。

人権について考えよう

12/4(木)から12/10(水)の1週間を「第77回人権週間」と定め、『「誰か」のことじゃない』をテーマに、全国各地で多数のイベントが実施されました。美浜町でも、この人権週間に人権作品の表彰式・作品展覧や人権協の活動紹介コーナー、人権共同作品の体験コーナー等を設け、多くの方々に人権について考える場を提供させていただきました。

展示



人権作品展覧



人権協活動紹介



人権作品表彰式の様子

「大切な想い」をハートの実にはま込もう!

体験コーナー



ハートの実のなる木